JA表彰

JA表彰 全農会長賞

福岡県 JA筑前あさくら

豪雨で被災した柿農家に対し、農地や施設を確保・整備するJAファーム事業を活用したアスパラガスの導入を提案。新設した3農場で、計6人の入植者を受け入れ、栽培面積・販売高の増加などにつなげた。

また、大豆の収量低下に対し、TACなどで構成される「未来に向かう土づくりプロジェクト」を立ち上げ、土壌診断を活用した土づくり肥料の施用や、省力化技術である部分浅耕一工程播種を提案。増収・品質向上、播種労働時間などの削減につなげた。さらに、イチゴのパック詰めとアスパラガスの自動選別ラインを備えたパッケージセンターを新設し、栽培面積の拡大と省力化による作業時間の確保から収量・品質の向上を実現した。

JA表彰

石川県 JA松任

農家手取り最大化の実践に伴い、人材育成や労働環境整備などに取り組むため、経営体とJA・全農・その他関係機関との定例会議を通じて、担い手との関係性を強化した。

また、5か年収支シミュレーションの作成や資金借り入れ相談への対応、記帳代行サービスなど、担い手のための法人設立を支援。農業法人との信頼関係の構築、資金借入によるライスセンターの設置で大麦の作付拡大や、法人化後の会計処理の不安を解消した。

さらに、管内農業の実情に即した「地域農業振興計画」を策定。無料職業紹介所・農業求人サイトの活用による労働力支援事業を展開し、求職者との面談により条件にあった人材を紹介した。

JA表彰

兵庫県 JAたじま

担い手と実需者とのマッチングによる多収穫米の作付拡大に取り組み、熟期の異なる品種の組み合わせによる作業分散および適期刈取りによる品質向上や、多収性品種導入による所得増大・JA出荷量の増加を実現した。また、多収穫米技術研修大会や多収穫米選手権を実施し、技術・生産意欲の向上を図った。

また、大型規格農薬と低コスト肥料のセット提案による担い手の資材コスト低減を実現し、JA購買供給高の増加にも寄与する取り組みとした。

さらに、LINEを活用し、リアルタイムで確実な情報配信サービスを展開した。映像の配信なども可能なため、多くの生産者に評価され、利用いただいている。

JA表彰

熊本県 JA阿蘇

新規就農者に先進農家が技術的指導を行う農業師匠制度の提案や、融資渉外員と連携した融資提案を行った結果、地域のつながりの形成や初年度からの安定的な経営を実現し、6年間で離農者0人であった。

また、経営継続補助金の利用から高金利な民間クレジット支払いに悩んでいる担い手に対し、低金利の農業資金への借り替えを提案。その他、視察研修の実施、他法人の経営状況の紹介など法人化支援を積極的に展開し、新たに3法人の立ち上げにつなげた。

さらに、JA倉庫を活用することにより肥料満車直行を利用可能にしたJA一体型肥料満車直行企画を担い手に提案し、肥料のコスト削減に貢献した。

JA特別表彰
～出向く活動強化運動部門～

秋田県 JAこまち

担い手の意見・要望の対応結果の整備では、営農指導員や、営農センター職員もTACシステムを活用することで進捗管理や情報共有の幅を広げ、担い手からの意見・要望に対応できた。また、他部門や役員への活動報告により「活動の見える化」につなげた。

総合力を活かした施策提案では「JA事業推進プロジェクト」を立ち上げ、担い手情報シートの作成や関係部署の同行訪問により、総合的視野とスピード感をもって課題解決に取り組んだ。さらに、実績集計や経営分析により、課題の明確化・共有を図った。

これらを通じて提案型の訪問が増え、担い手にとっての有利販売・生産性向上につなげることができた。

TAC特別表彰
～努力・共感部門～

埼玉県 JA埼玉ひびきの

野平 巧氏

JA低利用農家に対し、県域担い手サポートセンターと連携して継続訪問を実施。イチゴ栽培では光合成促進機の提案や栽培指導を、露地栽培では収量・品質の安定のために土づくりの提案をした。

その後、イチゴでは日照不足による作柄不安定への対策としキュウリへの作物転換の提案を、露地野菜では新規栽培のネギの品種選定から収穫時期までの栽培指導をした他、露地品目の集約、JAの共販出荷を提案した。

その結果、キュウリの売上が1年で4.7倍に増加した他、土づくり提案による担い手の意識向上、ネギの栽培面積拡大などを達成し、担い手から感謝の声が聞かれるようになった。

佐賀県 JAさが

久保 喜久男氏

中山間地の集落営農組合組織に対し、TACが話し合いの場づくりとアンケート調査を実施した。挙げられた課題に対し、農地の担い手の明確化、遊休農地解消、人員確保などに取り組み、構成員の課題解決につなげた。

また、JAと組合員との関係希薄化が問題となっていたため、最低月1回の訪問を実施した。当初は担い手から厳しい声が挙がっていたが、JA独自事業や、肥料の事前大口予約購買、大型規格農薬などの提案で根気強くコスト低減に向けた説明を行った結果、JAへの信頼回復につながり、「JAの生産資材は高い」というイメージも払拭できた。

TACトップランナーズ JA表彰

愛媛県 JAおちいまばり

特産品のサトイモの生産拡大に向けて、担い手の規模に応じた機械化一貫体系の提案やドローン防除の作業受託などに取り組み、作付面積・販売高の拡大、生産者の増加につなげた。また、担い手の高齢化、耕作放棄地の増加などに対応するために新規就農サポート事業を展開。開始から5年目の今年までに8人が就農し、地元に根付く新規就農者の確保に貢献している。

労働力支援事業では、JA職員による「心耕隊（しんこうたい）」の結成やJA出資型農業生産法人を設立し、TACが労働力支援のコーディネートや新規就農者の雇用、農作業受託のパイプ役を担うなど、産地の維持・拡大に貢献している。

TAC表彰

岩手県 JAいわて中央 玉山 正彦氏

法人とTACが次世代へつなぐ取り組み

日本最大級の大型法人に対し、Z-GISによる圃場情報の共有化およびリモートセンシングによる水稲の生育診断を提案。適期作業による米品質の向上に貢献した。

また、JAが支援し立ち上げた法人が抱える労働力不足に対し、Z-GIS・Z-BFMによる経営の見える化を提案し、事業承継や作付面積の適正化、正確な圃場管理といった課題の解決に取り組んだ。さらに、同法人が抱える繁忙期の人材確保の課題に対し、Z-BFMによる年間労働力のシミュレーションを踏まえた人材確保の支援を行うことで、法人が希望する時期での収穫を可能とし、収穫量の増加につなげた。

岩手県 JAいわて花巻 髙橋 望氏

ちいさな雪国の地域密着型TAC活動

耕作放棄地という地域の課題に挑戦する法人に対し、Z-GISによる圃場データの一元管理、farmoによる水管理・温度管理の省力化を提案。効率的・省力的な圃場管理を実現した。

また、高齢化に伴う作業労力の削減を望む経営体に対し、担い手金融リーダーと同行訪問し、オペレータ資格取得費用や推奨セットの見積り提案などドローン導入を支援。農薬散布の労力削減を実現した。

さらに、雇用労働力確保を求める法人に対してJAの無料職業紹介所の活用を提案、また、オープンファームを通じて農業大学校の学生からの採用が内定し、担い手の要望に的確に応えることができた。

石川県 JA金沢市 押田 哲男氏

担い手の持続可能な経営発展のために

行政・JAが連携して設立した協業型法人の効果的な運営を目指し、露地品目拡大や農福連携などを通じて労働力の確保と収益の向上を実現した。さらに果樹版協業型法人を設立し、融資提案による運転資金の確保や作業計画の策定を支援。農地の集約と経営安定に貢献した。

また、行政・全農県本部と連携して「チームスマート」を結成。Z-GISなどの導入による適期作業を実現させ、担い手所得増大につなげた。

加えて、それぞれの経営体が持つ課題に対応した事業承継支援により後継者確保につなげるとともに、融資の迅速化に向けて金融部門との連携強化に取り組んだ。

島根県 JAしまね 斐川地区本部 原 紀行氏

大事なのは向き合うこと ～TACが懸け橋に～

地域において世代交代がうまくいかず、先延ばしにしているという実情を受け、JAが事業承継支援を行っていることをPRするとともに、事業承継ブックを活用した支援や、行政も参画したチームによる事業承継計画策定後の支援を行い、事業承継の取り組みを拡大した。

また、事業承継後の農業経営に不安を持つ後継者に、タブレットを活用した経営分析・改善提案などを行い、不安を払拭することに尽力した。

さらに、高温で作業効率が落ちている生産者に、MAFFアプリを活用した熱中症の注意喚起や、空調服の提案により、夏場の作業効率化と事故軽減につなげた。

島根県 JAしまね 島根おおち地区本部 前田 晃弘氏

川本町ピーマン大作戦（ピーマン次郎物語）

地域の農業人口減少・高齢化やサル食害などによる生産意欲減退の解決に向け、食害が極めて少なくパイケーパーから需要のあるピーマンの産地振興を「ピーマン大作戦」と称し、町を挙げて取り組んだ。

同作戦では、行政を巻き込んだ新規補助金の獲得、青年連盟の協力による支柱設置作業支援、チラシや説明会などによる周知活動、町営バスを活用した「貸客混載事業」による新たな物流の仕組みづくり、地元小学校での食育活動など、さまざまな振興策に取り組んだ。

その結果、作付面積は約2倍となり、新規生産者14人の掘り起こしにつなげるなど、ピーマン大作戦を地域全体に拡大することができた。

岡山県 JA晴れの国岡山 津山統括本部 森 弘光氏

集落営農法人の部会組織化3年目 取り組み加速は止まらない！

集落営農法人部会からの圃場管理や土壌改良の要望に対し、土づくり研修会や土壌診断を契機としたZ-GISなどのスマート農業の導入を支援。さらに作業受委託の提案により、資材費圧縮や作業効率向上を実現した。

また、米の安定販売に向け、里海米の生産拡大やロット確保のために出荷目標を5,000俵とした達成奨励金を提案した他、飼料用米への作付転換、大手ファミレスなどとの契約栽培により、担い手所得の向上・安定化に寄与した。

さらに、道路交通法の規制緩和に伴う大型特殊免許の取得支援の要望に対し、免許取得講習会の実施や講習費用の補助金活用提案を行い、免許取得率の向上に取り組んだ。

TAC（タック）とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の全国統一愛称です。

全国の約1,500人のTACが、約62,000人の農業経営者を日々訪問し、農業経営に関するあらゆる相談に応えています。役割や活動状況については、TACのホームページをご覧ください。

TACのホームページ

全国農業協同組合連合会 耕種総合対策部 TAC推進課 TEL：03-6271-8276 URL：https://www.zennoh.or.jp/tac/index.html

TACパワーアップ大会2021を開催!!!

JA全農は11月17、18の両日、「TACパワーアップ大会2021」を横浜市で開催しました。地域農業の担い手に出向くJA担当者（愛称：TAC）の活動成果を共有する全国大会として、現地に約200人、WEBと合わせると計約450人が参加しました。14回目となる今回は、担い手の構造変化に対応できる出向く活動体制の強化、多様なニーズに対応した労働力支援・事業承継・スマート農業の取組加速、コロナ禍における創意工夫あるTAC活動の実践をテーマに掲げました。優れた活動をしたJAやTACの表彰、事例発表、基調講演、大会宣言の採択の他、事業承継や農業労働力支援、農家手取り最大化など5つのテーマで分科会を開催しました。

大会あいさつで全農の菅野幸雄会長はTACの活動について、農業現場の今を的確に捉えた事例がたくさんある。組合員の営農を支え、日本の農業の発展に貢献してほしい」とエールを送りました。

来賓としてあいさつした農林水産省経営局協同組織課の三上卓矢課長は「TACは担い手の新たな課題解決に幅広く柔軟に取り組んでいる。TACの活動が地域の活性化、農業所得の向上に貢献できることを期待している」と評価しました。

『地域農業の原動力として活躍してほしいと訴えるJA全青協の梯会長』

『TACの活動が組合員から評価を得ていると称賛する農水省協同組織課の三上課長』

『日本の農業の発展に貢献してほしいとエールを送るJA全農の菅野会長』

さらに、TACへのエールとして全農所属の石川佳純選手がビデオメッセージで登場しました。

TACは2020年度の実績で、全国2061JAの1459人が、約6万2000人の担い手を訪問し、面談数は49万回に達しました。

全農耕種総合対策部の宗和弘部長は、「10年後には基幹的農業従事者数が約4割減少し、国内販売額の8割を2割の担い手が生産するなど、農業を取り巻く情勢はより厳しくなっている。これに伴い、担い手ニーズはより多様化・高度化しており、それに対応するTACの活動も常に変化や見直しが求められている。この状況に対応するべく、全農は、担い手への積極的なアプローチや総合事業提案の取り組みを強化し、体制づくりを進めていきたい。また、担い手に寄り添いながら、経営改善や新規就農、事業承継などの支援を進め、JAグループのファンづくりに貢献していきたい」など、TACの活動強化に向けた考え方を示しました。

大会ではTACのさらなる発展を目指して、①JAグループの力を結集し、担い手に出向き・寄り添い・ともに歩みます②変革する「今」を的確に捉え、担い手の営農を支援します③地域に根ざすTACとして、担い手とともに新たな農業の形を創造します」とする「大会宣言」を採択しました。

TACにエールを送る全農所属の石川選手

大会宣言を読み上げるJAしまね「島根」の前田晃弘さん

大会宣言

我々TACは、

一、JAグループの力を結集し、担い手に出向き・寄り添い・ともに歩みます。

一、変革する「今」を的確に捉え、担い手の営農を支援します。

一、地域に根ざすTACとして、担い手とともに新たな農業の形を創造します。

TAC上下プランナーズ・JA表彰を受賞し事例発表するJAおちいまばり（愛媛）の森康弘部長

全農会長賞を受賞し事例発表するJA筑前あさくら（福岡）の早野司洋課長

全農会長賞の表彰を受けるJA筑前あさくら（福岡）の星野正徳常務理事

参加者による 分科会

参加者がテーマごとに5つの分科会で議論しました。

分科会1 JA未利用・低利用担い手へのアプローチ

近年、担い手農家のJA規模化が進んでいる中、大規模農家のJA離れも進んでいる実態があります。今後農業生産額の大部分を占めると予想される大規模農家との接点強化が課題となっています。

これらの課題を解決するため、本分科会では優良事例として、TAC特別表彰受賞者であるJA埼玉ひびきの（埼玉）の野平氏、JAさが（佐賀）の久保氏から取り組み事例を報告いただき、グループワークによる課題とされに対する具体的な解決策を協議しました。

グループ発表では各班から様々な対応策が提示され、参加者からは「地域は違っても課題は同じ」「JAの総合力を発揮した担い手対策を講じることが重要だ」とのコメントをいただきました。

分科会2 事業承継（後継者育成）

担い手の高齢化は進行し、地域における次世代の確保、次世代の事業の承継を支援する取り組みが求められています。各地で開催されているセミナーや啓発活動によりJAでは事業承継の必要性に関する理解が少しずつ深まってきていますが、「万ではJAとして取り組みを進めるためには生産者の提案がきっかけづくりが課題となっています。

各地でおこなわれている取り組みの実例を交えながら事業承継支援のポイントを紹介した後、生産者に事業承継の提案を行うためのきっかけづくりについて議論を行いました。意見交換の中で取り組みへの機運が高まり、あらためて取り組みを強化していきたいという声も聞こえました。

分科会3 農業労働力支援

農業における労働力不足の現状やパートナー企業連携による農作業請負の取組意義・事例を共有し、①農家・働き手双方の視点からメリット・デメリットについて考え、②どのような担い手農家に、情報提供・提案をするとより効果的かを議論しました。

地域農業の維持には、多様な人材が農業により多く関われるようハードルを下げることが必要とされます。

参加者は、「自身が「農家」「働き手」だったら」の視点で議論し、「請負でより多くの人に農業に関わってもらうには、農作業の細分化が必要」「請負内容を巡りたくさんと確認する」「規模拡大を図りたい農家にパートナー企業と同行したい」など、活発な意見が出されました。

分科会4 スマート農業

基幹的農業従事者数の減少や深刻な高齢化により農業を取り巻く労働力が減少する一方で、担い手一人当たりの耕作面積は拡大しており、スマート農業やデータ駆動型農業の必要性がますます高まりを見せています。それらの対応策として、ZGISとサルビオの機能や全国での活用事例を紹介した後、参加者の担当地域におけるスマート農業の普及状況や課題を共有。さらに、Z-GISを使用するTACとしてどうアクションするかについて活発に意見交換し、グループごとに発表を行いました。参加者からは「活用メリットを明確にして担い手への提案を進めたい」という声がありました。

分科会5 農家手取り最大化

農家手取り最大化は、担い手にとっての最重要課題であり、TAC活動においても最重要課題であり、TAC活動においても切り離すことができない重要なキーワードとなっています。また、農家手取り最大化を検討する上で、農業を経営的な視点から考えることは重要です。本分科会では、農家経営と提案活動の関係性の検討や経営改善のPDCAサイクルをグループワークとして体験する中で、農家手取り最大化に向けて、TACとして何ができるのかを検討しました。農業経営という視点で、経営者でもある担い手に対しての提案やその進め方について、参加者の活発な意見交換が行われました。

14回目となる今年のTACパワーアップ大会は、①担い手の構造変化に対応できる出向く活動体制の強化②多様なニーズに対応した労働力支援・事業承継・スマート農業の取組加速③コロナ禍における創意工夫あるTAC活動の実践―をテーマに活気あふれる大会となりました。